IS fA　〈インフィニット・ストラトス フォーアンサー〉

蜻蛉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　ｆＡ　〈インフィニット・ストラトス　フォーアンサー〉

【Ｎコード】
Ｎ１６４６Ｖ

【作者名】
蜻蛉

【あらすじ】
独立傭兵のダン・モロは同じ独立傭兵のカニスと共にある依頼を受ける。内容はトーラス社の新技術のテスト。そして二人はそのテストに巻き込まれ、女尊男卑が当たり前となっている世界に飛ばされてしまった。　よくあるＡＣ×ＩＳのクロスオーバーです。ご都合主義だったり、更新が遅かったり、コジマ汚染があったり、一部独自設定などのフロム脳があったりします。こんなものでよければ温かい目で見てください。

プロローグ（前書き）

はじめまして。蜻蛉と申します。
ＡＣとＩＳのクロスオーバーです。
ここでＡＣとＩＳのクロスオーバーを執筆していらっしゃる先人方に影響され、書いてしまいました。
とりあえず、これを読んでくださった方々には少しでも楽しんでいってもらえたら幸いです。

プロローグ

「もう、終わったのか…？」

レーダー上に敵の反応が無くなる。あるのは味方を現す緑色のポインタ。

「やっぱり、無理なのかな…俺には…」

俺をこのミッションに誘った“アイツ”はこちらに向かってくる。

「あんた、どう思う…？」

“アイツ”は何も言わなかった。答えも期待していなかった。だが、何か言ってほしかった。

ダン・モロは上空を見上げる。回収のための輸送機が見えた。

『お前は、もうちょっと自信を持てよ』

「えっ？」

思ってもいなかった返事。思わず変な声を出してしまった。

『自信を持って一歩踏み出してみろよ？　それで駄目だったら、向いてないんだよ、きっと』

“アイツ”の言葉がずっしりくる。前に、有澤のＯＩＧＡＭＩを試しに装備した時よりもずっしりときた。

俺は何も言えずにいた。そして、左手のライフルを、手放した。

「トーラスからの仕事？」

未確認ＡＦ（アームズ・フォート）の破壊から数日後、ダン・モロはインテリオルの仲介人から仕事が舞い込んできた。

『はい。私達にも詳しく、というか全くわからないのですが、何やら新技術を完成させたようで。

そのテストに参加して欲しいとのことです。なお、このミッションは支援機が認められています。

必要であれば、他の独立傭兵に声をかけてみるのもいいでしょう。

ユニオンはあなたを高く評価しています。よいお返事を期待していますね』

胡散臭い話だ。トーラスが関わるとロクな事にならない。この仲介人の言う事も嘘くさい。俺を評価している？　冗談も大概にしろ。なのに、俺は知り合いの独立傭兵である、カニスに連絡を入れていた。

「なぁ、カニス。ちょっと頼みがあってな…」

『あ？　なんだよ、頼みって』

「あぁ、ちょっとな。きな臭い依頼なんだが…。トーラスのテストに参加して欲しいんだと。

僚機の使用は自由で、独立傭兵なら誰でもいいんだってさ」

『ちょっとデータ送ってくれ』

言われた通り、簡単な概要を送る。ミッションの時刻、場所、報酬といった簡単な物しかなかったが。

『ダン、これ受けるわ。前払いすげぇ額だぞ。受けない理由は無いな』

カニスの笑いが通信機越しに伝わってきた。

「でもいいのか？　お前ローゼンタール寄りだろ？」

『お前もＧＡ寄りじゃねぇか。俺達は独立傭兵。
どこかの企業に寄ってる部分はあれど、依頼は自由に選べるはずだろ？』

カニスの弾んだ声。それもそうだな、と思う。それに、“アイツ”の言葉。
俺はこの依頼を受けることにした。

それが、俺とカニスの運命を大きく変えたんだ。

指定された日時に、ダン・モロとカニスはいた。場所はトーラスの実験施設。
ダンのネクスト、セレブリティ・アッシュとカニスのサベージビーストはその施設の特別実験棟にいた。

『このテストに参加してくれた事に感謝するよ。
　このテストが成功すれば我々の盟友キサラギを助けることが…あ、失礼。では、始めようか』

トーラスの技術者が何か変なことを口走っていたが気にしない。そんなことにいちいち気にしていたら、キリがない。それだけ変人揃いなのだ。このトーラスという企業は。

『ま、俺らなら楽勝だな。にしてもダン、今日はやけに静かだな。具合でも悪いのか？』

カニスが通信してくる。気分は悪くないと言えば、嘘になるかもしれない。

「いや、大丈夫だ。ただ、嫌な予感がする」

『あぁ、確かに。何やんのか教えられてないしなぁ。あーあ、前払いにホイホイされちまったぜ』

カニスの言葉に何も言わない。冷や汗が出ていた。
中央に見覚えのある巨大な球体。

『では、二人ともこの近くに来てくれ』

技術者の指示。本能的にアレに近づいてはいけないような気がする。
だが、仕事だからやらねばいけない。
歩いて近寄ると、その大きさに再度驚かされた。ネクスト2機は入りそうだ。

途端、球体は緑色に発光しだす。中規模のコジマ反応。この空間のコジマ粒子の濃度が徐々に、いや、急激に上がっていっている。

『おいおい、これ本格的にヤバいんじゃねぇの？！』

カニスの叫び。俺は言葉を口に出すことさえも出来なかった。
球体の光は更に増す。濃度も上がっていく。まるで、アサルトアーマー。
そして、光は爆ぜた。

「うわぁっ？！」

『ちょっ！　まっ！？』

コジマの波と衝撃波が2機のネクストを飲み込む。バランスを崩し、倒れそうになる。
光がフロアを飲み込み、そして収束していく。
トーラスの技術主任はフロアの複数のカメラを使い、内部を見る。
コジマ粒子が視認できるくらいの濃度で漂っていた。

「実験は…成功だ…！」

球体は壊れてしまっていたが、テストは成功した。被検体の2機が“消えて”いる。
このテストの目的は……

……無数に存在するとされている、“平行世界”へ物体を転送させるという、突拍子もない内容だった。

プロローグ（後書き）

如何でしたか？
些かご都合主義なところもあるでしょうが、これを読んで少しでも面白いと思ってもらえれば幸いです。

ＡＣの二次創作でコジマとトーラスほど便利なものはない

1話（前書き）

今回はＩＳ側でのお話ですね。カニモロが出現です。
それでは、楽しんでいってください。

サブタイトルを変更しました。シンプルイズベストです。

1話

ＩＳ学園は慌ただしかった。
学園のアリーナで、奇妙な緑の光が現れ、その直後にかなり高い数値の放射線量が観測され、正体不明の汚染物質がアリーナを満たしていた。
運が良かったのは、普段は使われないアリーナで、誰もそこにいなかったことだろう。

「各隔壁のロックは完了しています。それにしても一体何なんでしょうか、織斑先生」

眼鏡をかけた童顔の女性、山田真耶が、隣のスーツ姿の女性、織斑千冬に話しかける。

「耐爆・耐核・耐汚染機構が速く作動したのが幸いだった。
それにしても、どういうことだ？　さっきまでの異常な数値がものの数分で消滅だと…」

「汚染物質もほぼ消えていますね。どういうことでしょうか？
あ、カメラが復活しましたよ。映像を映します」

頷き、真耶に映像をスクリーンに映させる。
そして映っていたものに驚愕した。

「人…だと？」

「奇妙な姿ですね。何かのスーツみたいですけど…。
カメラでは顔は見れませんね、ヘルメットが邪魔ですし。どうし

ましょう？」

「防護服を用意してくれ。回収する。手伝ってくれ」

「わ、私もですか？！」

「他に誰がいる？　さっさと付いてきてくれ」

若干涙目で、千冬の後を追う真耶だった。

数分後、赤色の全身を覆う防護服を身に纏い、アリーナ内部に二人は入る。真耶は放射線量を測っていた。

「織斑先生！　おかしいです！　通常時の放射線量と変わりませんよ」

測定器の数値を見せる。通常時と変わらない数値だった。

「確かにおかしい。だが、まずはこの二名を回収するのが先だ。気を失っているようだが、もしかしたら怪我をしているかもしれない、保健室に運ぼう。
尋問はその後だ」

青をベースとした服を着た者を担いで千冬は言う。体格からして二人とも男だろう。真耶には黄色と黒のストライプの方を任せた。その後、千冬達は汚染物質を一応洗い流し、二人の男を保健室へと運び込んだ。

「んぁ……ここは、どこだ？」

ダン・モロの意識が覚醒した。最初に目に入ったのは見知らぬ部屋だった。トーラスの施設ではないことはわかる。部屋に痛々しいポスター等が貼られてないからだ。
ネクストのパイロットスーツではなく、その下のインナー姿で、ベッドに寝かされているのに気づく。隣を見るとカニスがいびきをかいて寝ていた。鼻からもちろんはなちょうちん。

「俺は、トーラスのテストに参加して…。
その後変な光に飲まれて…だめだ、そっからが思い出せない」

「よぉ、ダン。よく寝たぜ」

カニスが起き、軽口をたたく。こいつはずっとこうだからな。
だがそこがいい、と思っていると、ドアが急に開いた。二人の女性が入ってくる。

「目が覚めたか。お目覚めのところ悪いが、こちらの質問に答えてもらおうか」

威圧感が半端じゃない。もう一人の眼鏡の方はおろおろしている。

「だが断る。って言ったら？」

カニスがへらへらしながら言う。目は笑っていなかったが。

「その場合はこちらで拘束する。どんな手でを使ってでも吐かせる」
「おぉ、こわいこわい。ま、いいけどよ。かわりにこちらの質問にも答えてもらうぜ？」
臆することなく食って掛かるカニス。
「お前ら次第だ。まず、お前らは何者だ？」
「俺らはリンクスだ。独立傭兵のな。俺はカニス。カラードランクＮｏ．２２だ。
知らないとは言わせないぜ？」
「お、俺はダン・モロ。同じく独立傭兵だ。カラードランクＮｏ．２８」
「知らんな。リンクス、カラードとは何だ。何かのテロ組織の名称か？」
鋭い眼光で睨まれる。流石のカニスも若干たじろぐ。
「カラードは傭兵・リンクスの管理機構だ。
んで、リンクスってのは、最強の人型起動兵器アーマードコア・ネクストを動かせる人間のことさ。
全く、タチの悪いドッキリか、こりゃ」
「それはこっちが言いたい。私たちはそんなもの知らん。要はお前らは傭兵か？」

「そうだって言ってんじゃんかよー。話聞いとけ……すいません」
一睨みしただけであのカニスが黙り込む。この女の人は怒らせない方がいい。
「……次だ、何が目的であそこにいた」
「何って、俺らはトーラスの依頼を受けて、実験施設にいる。ここはそうだろう？」
カニスはまだ震えている。眼鏡の人が慰めているが、まだ怯えてる。お前最強（自称）なんだろ？
「違う。そのトーラスというのがどんな組織で、お前らがどんな依頼を受けたかは知らんが、
ここはＩＳ学園だ。どんな国家や企業の干渉も受けない。それをお前らは…」
「ちょい待ち。ＩＳってなんだよ？　学園って言うからにはそれについて勉強するんだろうけど…」
カニスが復活し、聞き返す。呆れたように眉間に手を当てる。
「ＩＳ、インフィニット・ストラトス。
宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツだ」
「パワード・スーツ？」
ダンが呟く。

「そう捉えてくれて構わん。全く、お互いの話が噛み合っていないな」

女性はそう言い、これまでの事を整理し始めた。
まず、ここはＩＳ学園であって、トーラスの実験施設じゃないということ。その施設で異常な放射線量と汚染物質が感知され、俺達はそこでぶっ倒れていたと。
次、俺らはＩＳとかいうパワード・スーツを知らない。逆に相手はＡＣ、ネクストやノーマルどころか、ＭＴでさえ知らない。というか、“ここには存在していない”。
次、解体された筈の国家が世界を管理していて、パックス・エコノミカではない。
そして、最後。この“世界”はコジマ汚染されていないということ。
そして俺らはなぜか１５の体に若返っていた。きっとコジマのせいだな。

「とりあえず、お前らの処置は追って話す。明日また来る。
若干衰弱しているから、今日はゆっくり休め」

そう言って、二人は出て行った。残されたのは俺ら二人。

「…なぁ、カニス。ここってよぉ…」

「言うな。考えたくもない。全くよぉ、信じられっかよ。
女しか扱えないパワード・スーツ、女尊男卑の風潮。やってられっか」

カニスはそのまま寝てしまった。よく寝るな、コイツ。
ダン・モロは窓の外を見ていた。緑の自然、生徒と思われる声。綺

麗な空。

「俺も寝っか」

考えたくなくても、そういう結論にたどり着いた。
ここが、“別の世界”だということに。

千冬と麻耶は二人小声で話し合っていた。

「一体なんなんでしょうね、あの二人。ちょっと言ってることが分かんなかったんですが…。
タチの悪い薬とかに手を出してるんじゃ…」

「検査の際、二人とも麻薬反応はなかったぞ。代わりに厄介なモンが二つほど出たが」

頭を抱える千冬。

「一体何なんです？　厄介なモンって？」

「ＩＳ適正だよ。二人ともな。しかも高いときた。
柄の悪いカニスってのがＡ、もう一人のひ弱そうなのダン・モロがＡ＋だ」

「えっ？！　嘘でしょう！？」

真耶は驚きのあまりつい大声を出してしまった。ここは職員室。他の教員がこちらを見る。

慌てて取り繕う真耶だった。

「にしても、アーマードコア・ネクストか…。“あの箱”の言っていたこともあながち嘘ではないと…」

「箱って…、あの海からサルベージしたコンピュータですか？」

「まぁ、いい。問題は山積みだ。全く、出来の悪い弟といい、訳の分からない男二人といい…」

千冬は机の上に目を移す。机の上には、ケースに入れられた二つのリストバンド。

青にアメコミのヒーローの様なものが描かれたものと、黄色に犬の柄が描かれたものの二つ。

「えぇ、驚きです。二人ともＩＳを所持していたなんて。しかも、未確認のコアが搭載されてますし。一体どこの人たちなんでしょうかね？」

「あの二人の血液を採ったとき、血中から汚染物質が見つかった。極々微量で、人体に影響は無いと思われるが…」

「思われるが、何です？」

「地球上には存在しない物質だ…」

何時になく深刻な顔をしている千冬を真耶は初めて見た。

千冬は一冊の本を開く。量子力学と書いてあった。

「量子論の本ですか？」

「あぁ。私は専門外だから詳しいことはわからないがな。山田君、君は多世界解釈を知っているか？」

「観測者によって、世界というものが分岐していく、というのですか？」

「それは間違いらしい。多世界解釈というのは、
あくまで、宇宙全体が『巨大な可能性の波（＝一つのシュレディンガー方程式）』であると考えている、
つまり『初めから分岐している』と言える、事らしい。正直サッパリだ」

本を閉じ、机の上に置く。同時に深いため息。
真耶はその本を手に取り、適当に捲っていく。

「つまり、何が言いたいんです？　あの二人がその分岐した世界から現れたとでも？
そんなＳＦ作品じゃあるまいし…」

「私だって考えたくないさ。あくまで、可能性の一つとして言ったまでだ。
この可能性を潰す為、今夜は徹夜だぞ」

「えぇ！？　勘弁してくださいよぉ」

真耶の叫びが、職員室内に響かなかった。

ほぼ同時刻

「腹…減ったぁ」

「出撃する3時間前からな～んも口にしてねぇよ…」

ダン・モロとカニスは、空腹と戦っていた。

1話（後書き）

如何でしたでしょうか。楽しんでいただけましたでしょうか？
上手くこじつけてみましたけど。

それにしてもコジマって便利

2話（前書き）

どうも。2話です。ちょっと短めかも。
今回は若干やっつけ感が否めないという。
とりあえず、グダグダな感じですね、今回。

サブタイトルを変更。

2話

朝、騒がしさで目が覚める。人の声や鳥の鳴き声が聞こえてくる。
クレイドルや地上ではこんなことはなかった。
ダン・モロはカーテンを開ける。日の光が眩しかった。

「朝食だ」

ドアが開かれ、パンと水が持ってこられた。二種類のジャムが付いている。
持ってきたのは千冬。ダンはあのセレン・ヘイズみたいな女が自らこんな事をするとは思えなかった為、内心驚いていた。
まだ寝ていたカニスは千冬に叩き起こされる。文字通りに。

「なっ、何だ！？　敵襲か！？」

「朝食だ馬鹿者。お前らには話すことも聞きたいことも山ほどあるんだからな」

カニスの分も渡す。カニスはそれを見て目を丸くした。

「…これ、高級品だよな？　こんないいパン初めてだ。しかも見てみろよダン。
ジャムまで付いてるぜ」

嬉々として食事にありつくカニス。苦笑いしながら食べ始めるダン。

「一体これはなんだ？　侵入者に特別待遇なのか？　この学園はよ」

「ある意味で特別待遇だがな。一体どんな食生活をしてきたんだ？
お前らは」

「単純に空腹を満たすだけのレーション位だな、飯っていったら。
栄養素は直接取り込むし」

「食料事態が少ないんだよ。殆どの農場プラントがダメになってるし。実際戦場だからな、あそこ」

ダンがジャムの袋を開けながら言う。不慣れなのか、何回か失敗していた。

「俺リッチランドで不明ネクストと戦ったぜ。
でもあそこは普通に続いてたからな、あそこで取れたものは若干食べる気がしないな」

「汚染されそうだかんな」

ハハハ、と二人で笑っていたが、千冬は何のことかサッパリだった。

「食事中だが、お前らに聞く。出身は何処だ？」

「「クレイドル」」

同時に喋り、言葉がハモった。

「クレイドル…か。ハァ、全く、面倒な事になったな。私は面倒が嫌いだというのに…」

「なっ、なんだよ」

カニスが食って掛かる。すると、ドアが開き、眼鏡の女性、真耶が入ってくる。

「すいませんっ！　遅れました…」

「持ってきてくれたか。昨日話した、ＩＳというのを覚えているな」

真耶が持ってきた箱を受け取り、二人に言った。

「あぁ。宇宙で活動するために開発されたとかいうパワード・スーツだろ？」

「そうだ。だが、従来兵器を圧倒する性能で軍事利用されかけたがな。

そうそう、昨日言い忘れていたが、ＩＳは何故か、女にしか扱えない」

二人の表情が固まる。

そうなるだろうな、と千冬は予想していた。

「はぁ？　意味わかんねえよ。ただでさえ訳わかんねぇ状況なのによ」

「私にもわからん。製作者が失踪したからな。

しかも面倒なことに、男でＩＳを起動できる奴まで現れた矢先にお前らだ。

私の苦労も考えて欲しいものだ」

ダンは何か気づいたような表情を一瞬浮かべ、そしてまた、いつも

の表情に戻る。

「お前らにも、適正が見つかった。しかもＩＳまで所持。訳が分からないのはこっちの台詞だよ」

「じゃ、じゃあよ…」

ダンがコップの水を見ながら言う。

「俺たちは、拘束されて、尋問でも受けるのか？　もしくは解剖でもされて、

ホルマリン漬け、とかじゃぁ、無いよな…？」

言葉は平静を保っているように聞こえた。コップの水が小刻みに揺れている。アスピナの実態を初めて見たときを思い出していた。

短い沈黙。時計の音が大きく聞こえた。

「…そんなことはしない。貴重なデータを採れる、と技術者も喜んでいたしな。

それとも、お前はそうなることがお望みか？」

「んな訳ないだろ！」

つい、大声を出してしまった。しまった、と後悔する。

セレン・ヘイズ並の威圧感を常時醸し出している相手になんてことをした、と。

「だろうな。私としてもそうはさせたくはない。でだ」

箱からリストバンドを取り出し、二人の前に置く。

「お前らをこのＩＳ学園で保護し、入学させる。
ここはあらゆる国家、企業、法律の干渉を受けない。半分有名無実化してきてはいるがな。
何、私が干渉させない。入学するなら、このＩＳを取れ」

「…これが？　リストバンドじゃねぇか」

カニスがリストバンドを指差し、言う。声には明らかに疑惑の念。

「待機状態だからな。専用機の待機状態はアクセサリーなどになる」

「へぇ～、まぁいいや。行くアテも無ぇし、いいぜ」

「仕方ないもんな。いいよ、やってやる」

二人とも、ソレを手に取り腕に付ける。

「そういや、まだあんたらの名前聞いてなかったな」

ダンは思い出したように言う。

「織斑千冬だ。これからはお前らの教師になるな」

「山田真耶です」

教師になる、と聞いて若干げんなりした。
こんなのが担任だなんて、これならばＡＦ部隊相手にした方が気が楽だ、とカニスは思っていた。

「ちょっと、聞きたいんだけどさ、千冬先生よ」
ダンは何とも言えない苦笑いを浮かべながら言う。
「何だ。言ってみろ」
「あぁ。あんた等、平行世界とかって、存在すると思うか？」
「…何をいきなり言い出すかと思えば。量子論か？　私は詳しくないんでな、何ともいえん」
「俺だってそうさ。で、思うか思わないか、どうなんだい？」
「無いとは、言いきれないな。あるとも思えないが。何が言いたい？」
頭に手を当て溜息を吐く。やっぱりか、と思った。
「俺らが、その平行世界ってのからやって来た、なんて言ったらさ、あんたは俺の正気を疑うかなって」
ダンは頬を掻く。だが、千冬は真面目な顔をして言い放つ。
「少し前までならな。結局、そういう結論になってしまうのか…。やはりな。私達も、そういう仮説を考えたよ」
「そうか…ならいいんだ。とりあえず俺らはここで生活すればいいんだな？
見た感じ、全寮制の学校みたいだし」

ダンはリストバンドを弄りながら言う。千冬の眉が動く。感心したような目。

「よく見ているな。でだ」

取り出したのは鈍器…ではなく、鈍器としても使えそうな分厚い本。大きく、必読、と書かれていた。

「……なんじゃ、そりゃ？」

カニスが嫌な顔をして言う。大体は読めてきた。俺にも嫌な汗が流れてきた。

二人分の鈍器もとい本を目の前に置く。

「参考書だ。特にＩＳの個人運用の欄等はよく読んでおけよ。とりあえず、これの内容を全て頭に叩き込め。一週間以内にな」

「ちょ、まっ！？」

「無理だ！　無理無理！！」

「無理だろうが何だろうが、私が言ったことには、はいかイエスで答えろ。出来なくてもやれ」

「「イエス、メム」」

随分と聞き分けが良くなった。理由は千冬が出していたオーラを感じ取ったからだろう。

カニスは参考書をパラパラと捲り、唸っていた。こんなん覚えきれるか、と叫んでは千冬に拳骨を食らっている。

「全くよぉ、タチの悪い冗談であってほしいけどな…」

まさか、訳わからん実験に付き合わされて、気付いたら平行世界に飛ばされ、そこで学生やらされる。たまったもんじゃない。

ダン・モロは口には出さずに覚えられるかと叫び、参考書を読んでいった。

2話（後書き）

最近千冬さんがセレンさんに見えてきて仕方ないという。コジマ汚染も末期か・・・

サブタイのセンスが異常に無いのが今の悩みどころです。

3話（前書き）

若干更新が遅くなりました。
今回はやっと原作主人公出現です。

サブタイトルを変更。やっぱり簡潔な方が個人的にいいかも。

3話

（これは……かなーり、キツイぞ……）

彼、織斑一夏の状態は非常にマズかった。周囲にはほぼすべて女子生徒。

かろうじて後ろの席に金髪の若干ガラの悪そうな男子生徒とその更に何席か後ろの方に茶髪の大人しそうな男子生徒がいること。

（よかった…この男俺一人という絶望的状況は免れた訳だ！　でも何で俺以外に男がいるんだろうか？）

「……くん。織斑一夏くんっ」

「は、はいっ！？」

一人で考え込んでいたから名前を呼ばれたことに気付かなかった。つい、声が裏返る。クスクスと笑い声が聞こえた。

副担任のこの子供みたいな教師に何度か名前を呼ばれていたみたいだった。

「あの、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる？怒ってるかな？ゴメンね、ゴメンね！でもね、自己紹介『あ』から始まって今『お』の織斑くんなんだよね。

だから、ご、ゴメンね？　自己紹介してくれるかな？自己紹介してくれるかな？ダメかな？」

気が付くと、担任の山田真耶先生がぺこぺこと頭を下げまくっていた。

あまりに頭を下げまくるのでサイズの微妙に合ってない眼鏡がずり落ちかける。

「あんまし謝らせるもんじゃねーぜ？」

後ろから聞こえる声。眠そうな目を擦りながら言う。こいつの言うとおりではある。

見た目は悪いが、いい奴なのかもな。

「ちゃ、ちゃんと自己紹介しますから、ホラ、落ち着いてください」

「ほ、本当？　本当ですか？　約束ですよ。絶対ですよ！」

ガバッと顔を上げ、一夏の手を取り、詰め寄ってくる。なんとかなんないかな、これ。

しかし、一度やると言ってしまった以上、男たるもの引くわけにはいかない。というか引けない。状況的にも。

「えー……。えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします」

言い終わると、礼。頭を下げ、そして上げた。何だよ、このもっと喋れよ的な雰囲気。

他に喋る事は無いぞ。おぃ、マジかよ……夢なら醒め……！

「おーう。じゃあ次俺かあ。マッハで終わらせてやんよ」

後ろのヤツがそう言いながら立ち上がる。助けてくれたのか？

山田先生の視線が出席簿に。そして視線を後ろのヤツに。俺はばれない様に座った。

「俺ぁ、カニスだ。これから宜しくな。あー……特に言うこと無ぇな。あ、あったわ。
犬が好きだ、俺。ちっこいのよりはデカいのが好きだな。だいたいこんな感じか。
じゃ、以上」

カニス、とかいうガラの悪いのは適当にすませると席に着く。あくびを噛み殺していた。

「ありがとう、さっきは助かったぜ」

「あ？気にすんな、　たいしたことじゃないぜ。こっちもさっさと終わらせたかったからなっ？！」

「いっ――――！」

二人は頭を何か硬いもので叩かれた。
振り返り、叩いてきた者の顔を見る。一夏の顔から血の気が引いた。

「げぇっ、関羽！？」

パァンッ！という音が教室に響く。これは痛い。見ろよ、周りが引いてるぞ。

「誰が三国志の英雄だ、馬鹿者」

「そうだぜ。あんなのが人間なわけ――い゛でっ！！」

カニス、君は口は災いの元、という言葉を知っているだろうか？
いや、知らないな。この様子じゃ。

再び脳天を出席簿で叩かれたカニス。今度は角だった。まあ、自業自得だな。

「織斑先生、もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな。それと、そこの突っ立てる男子。途中で遮ってしまった、続けてくれて構わない」

後ろを振り向く。茶髪の方だ。そいつは溜息を吐いてから口を開いた。

「えーっと、一応もう一回言っておくけど、俺はダン・モロ。趣味は……コミックとか好きだ。まぁ、そういうわけだ。よろしくな、みんな」

ダン・モロは適当に締めくくると席に着いた。そして、次の生徒が自己紹介を手短にしていった。

一時間目が終わり、カニスがダン・モロの席に向かう。

「これキツいなぁ、マジで」

「一人だけってことじゃないだけマシだな」

ダンは机に突っ伏して、カニスの言葉に返答。本当にカニスがいなかったらどうなっていたか。
すると、もう一人の男に話しかけられた。

「いやぁ、驚いたよ。俺以外に男がいたなんて」

こいつはカニスの前の席の奴だ、とダンは思い出す。

「名前はえーっと……織斑だっけ？　先生の弟の」

一時間目のＩＳの基礎理論授業の内容が多すぎて、クラスメイトの名前など、どこかにいっていた。
急いで記憶の片隅から相手の名前を割り出した。

「おう、織斑一夏だ。千冬姉が担任なんて聞いてねぇ、聞いてねぇよ」

「あんな怖い姉貴がいるなんて運が悪いな、一夏」

カニスが茶化す。だが、確かにあんな姉を持っている一夏は災難だとダンは思った。千冬の雰囲気があのセレン・ヘイズに似ていたからだ。
“アイツ”が言っていたが、あのオペレータはオペレータとしてはそこまでよくない、怖い、と言っていたのを思い出す。
平気で企業にケンカ売りかける様な人らしいからだ。
色々思い出していると、廊下の大量の女子と目があった。別クラスや別学年の女子生徒がいる。目があったのはその内の一人。

「うわっ」

つい、声を出してしまった。カニスと一夏が廊下を見る。

「ちょ、多っ」

カニスが言う。確かに多いけど言うなよ。やっぱり俺は人気者かー、といい気になっているカニスに一発殴ってやろうかと思った。
ふと、一夏の後ろに誰かが立っている。サムライみたいな髪の女子だった。

「何か用か？」

「あ、あぁ。一夏に。ちょっといいか？」

「え？　箒？」

箒、と呼ばれた女子はそのまま一夏を引っ張ってどこかに行った。
知り合いなんだろうか。
詳しいことはあとで聞けばよさそうだ。
ダンはカニスと、一夏が戻ってくるまで他愛ない話をしていた。周囲の視線に耐えながら。

ＩＳについての授業。山田先生が教科書をすらすらと読みながらすらすらと進んでいく。
ダンはちゃんと渡された参考書を読んでいたのでついて行けないわけではなかったが、それでもよくわからない部分はあった。

あの厚さの本を短期間で読み終えるだけでも大変なのに、それを頭の中にぶち込んで理解するのはもっと大変だ。半分はぶち込んだが。

（後で聞くか…）

ため息が漏れる。ノートにメモをしながら前方を見る。カニスは微動だにしない。目を開けながら寝ていやがるな。一夏は頭を抱えている。

あ、目ぇ付けられたな、山田先生にわからない事があれば言えって言われてやがる。まぁ、俺も若干わからない部分はあるけど。

「ほとんどわかりません！」

言い切りやがった。一夏の声で寝ていたと思われるカニスが目を覚ました。

周囲をキョロキョロしている。

一夏の言葉にオロオロしだす山田先生。

「えー、今の段階でわからないって人……」

カニスが手を挙げた。おいバカ、やめろ。

「三分の一は解るけど残りがわかんねェ」

それを見ていた千冬が二人の元へ歩いていく。あーあ、終わったな。

「織斑、カニス、入学前の参考書は読んだか」

「半分まで読んだら頭痛くなって熱だしかけたからそれ以降手ぇ付けてないぜ」

当然のことのように言うカニス。出席簿が振り下ろされた。
千冬の視線は一夏へ。

「……古い電話帳と間違えて捨てました」

ごつん、という鈍い音。千冬の拳が落とされる。マジで痛そうだ。

「後で再発行してやるから、一週間以内で全て覚えろ。カニス、お前もだ。いいな」

「おい、ちょ、待っ！」

「一週間であの分厚さはちょっと……」

「やれ、と言っている」

千冬はカニスと一夏を睨む。人じゃねぇ。ありゃぁ、悪魔（デーモン）だ、悪魔が人の形をとっているんだ。
どうすれば人が苦しむかを熟知してやがる。アルゼブラの蜘蛛女よりもタチが悪い。

「ＩＳはその機動性、攻撃力、制圧力と過去の兵器を遙かに凌ぐ。そういった『兵器』を理解せずに扱えば必ず事故が起こる。そうしないための基礎知識と訓練だ。理解できなくても覚えろそして守れ。カニス、お前ならば、そういうのは解っていると思ったんだがな」

そして、ちらりとこちらを見た。一瞬目が合う。蛇に睨まれた蛙とはこのことか。ネクストの事なんて話さなきゃよかったかな、とダ

ンは思った。
一夏は一瞬だが、嫌そうな顔をしていた。あの顔はリンクスになりたてだった頃の自分に見えた。

「貴様、『自分は望んでここにいるわけじゃない』なんて思っているな？」

驚きの表情を隠せなかった一夏。顔に出やすいのはすぐに分かったさ。
自分が望もうと望んでなかろうと、巨大な力の前には敵わない。自分だって望んでリンクスになったわけでもない。
はじめは嬉しかった。最強の兵器、アーマードコア・ネクストを操るリンクスになり、ヒーローになれると思った。
けど、現実は甘くない。いつ死ぬかもわからない恐怖。顔も知らない他人を殺す罪悪感。
何度、殺した相手の叫びを思い出し吐いたことか。何度、死んでいった者達の悪夢を見ただろうか。
自分のやっていることはヒーローみたいなことじゃない。ただの殺戮だ……。

「――それすら放棄するなら、まず人であることを辞めることだな」

途中までよく聞いていなかったから、前半はなんて言っていたのかわからない。あの地獄を思い出していたから。
人であることを辞める……俺の事じゃないか、と自嘲気味に思う。
リンクスになる際の手術で、体の幾つかは人工物に変えてあるし、人間の三大欲はかなり抑えられている。睡眠は一日に最低限1～2時間寝れば問題ない。食欲も抑えられている。性欲なんてものはほぼ皆無だ。
と、言っても普通の人間の様に、寝たければ普通に6時間7時間寝

れるし、食事だって食べたければ普通にバカ食いもできる。しかし、多くのリンクスは普通はしないし、しようともしない。
だけど、人間を辞めたリンクスを、俺は知っていた。一人は噂だけ聞いたことのある狂人。もう一人は――
考えていると、授業の終了を告げる音が鳴っていた。これから毎日こんな様子だと疲れるな、と呟いた。聞こえた者はいなかった。

3話（後書き）

えー、どうでしたか？

作者の想像として、リンクスはいろいろと体を弄られているという考えが。

ＡＭＳのコネクタを埋め込む際にいろいろ弄られて、旧作の強化人間みたいになってるんじゃないかなーと。

4話（前書き）

どうも、蜻蛉です。いろいろとバタバタしていたため、更新が遅れました。
多分これから更新が遅くなるかもしれませんが、最低でも1月に1話は投稿していきたい・・・

4話

「ちょっと、よろしくて？」

「お？」

「あ？」

「へ？」

二時間目の休み時間、カニスと一夏と話していたダンは、突然声を掛けられ、素っ頓狂な声を出した。他の二人も。
どうでもいいが、上から、ダン、カニス、一夏の順だ。
話しかけてきた相手は金髪が鮮やかな少女だった。ブルーの瞳がやや上がった状態で三人を見ている。

「ま、いいや。で、さっきの続きなんだけどよ」

カニスが彼女を無視して、話を続けようとする。カニスが話している途中に彼女が遮ってきたのだ。乱入してくるとはとんでもない奴だ。
そして、このバカのせいで、彼女のこめかみはピクピクしていた。
まぁ、仕方ないな。

「人の話を訊いてますの！」

「お、おぉ。訊いてるけどよ……どういう用件だ？」

ダンがカニスを軽くぶっ叩いて少女に言う。目の前の少女はかなりわざとらしく声を上げる。

面倒なのに目を付けられた、と内心呟く。

「まぁ！　なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんではないかしら？」

「……チッ」

つい、舌打ちしてしまった。目の前のは眉を少し吊り上げ、何も言わなかった。

こういうのは嫌いだ。横目でカニスと一夏を見る。

二人とも、怒りの籠った目をしていた。カニスのはいつ爆発しておかしくなさそうだった。彼は短気だ。中指を上げていた。ふぁっきん。

一夏の方は、カニスとは逆に、静かに怒りの炎を燻らせている。自分としては、こっちの方が相手にしたくない。

「悪い、俺はアンタが誰か知らないんだ」

俺は実際に彼女を知らない。自己紹介で何か言っていたかもしれないが、他人の名前なんか憶えておけるほど余裕もなかった。

墓穴掘ったか、と後悔する。二人の代わりに上手く丸く収めようと思い、言ってみたが、その一言がカンに障ったようだ。

正直、二人と同じく目の前の少女は気に入らない。吊り目を細め、男を見下したような口調で続けた。

「わたくしを知らない？　このセシリア・オルコットを？　イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを？」

セシリア・オルコット……、とダンは呟く。似た名前の少女を思い出す。丁度このくらいの年だったか。

ＢＦＦのトップリンクス。カラードランク２の少女、リリウム・ウォルコット。

カラードの施設で何度か話をしたことがあった。どうしてこんな自分と話ししたのかわからないが。

「あ、質問いいか？」

一夏が口を開く。何を言い出す？

「代表候補生って、何？」

「あ、俺も気になってた」

カニスも便乗。胃が痛くなってきた。強化済みだけど……。

がたたっ、という聞き耳を立てていたクラスの女子数名がずっこける。無理もない。

「あ、あ、あ……」

「「『あ』？」」

「あなたっ、本気でおっしゃってますの？！」

ものすごい剣幕で問い詰める。仕方ないよな、とここだけは同意する。

仕方なくアホ二人の為に教えてやる。

「クソの国家代表のＩＳ操縦者の候補生だって。その候補として選出されるエリートだってよ。
カニス、わかりやすく言えば企業の上位リンクスみたいなもんだ。
ローディーさんとか、ジェラルド・ジェンドリンみたいなもんだと思えばいいよ」

「そう言われればそうか」

「へー」

なるほど、と一夏。聞いてなさそうで実は聞いてる時のカニス。

「そう！　エリートなのですわ！」

びしっ、と俺らに向けた指が近かった。
そしてまだ続ける。

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡……幸運なのです。その現実をもう少しりかいしていただける？」

「そうか、それはラッキーだ」

「だな、ラッキーだ。運使い果たしたかもな」

一夏とカニスが言う。カニスは明らかに馬鹿にしたような声。

「……馬鹿にしていますの？」

「わかるか？」

火に油を注ぐ。聞いていられない。

「選ばれた人間か……。所詮、たった一つの国家から選ばれた数人の一人だろ？　世界から……」

「おい、カニス。その辺にしとけって」

カニスの言葉を途中で遮る。これ以上言わせたら面倒だ。何処かの面倒嫌いみたくなってきそうだ。

「……まぁ、いいわ。大体、あなたＩＳについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。男でＩＳを使えると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど、期待はずれですわね」

「期待したお前が馬鹿だったのさ」

「俺に期待されてもな……」

未だにケンカ腰のカニス。一夏は本当に困ったように言う。そういえば偶然機動させちゃったんだっけ。

「ふん、まあでも？私は優秀ですから、あなた方のような人間にも優しく教えてあげますわ」

その程度の優しさクソくらえだ、と思っても口には出さない。ややこしくなってほしくないからだ。

カニスが中指を上げていた。それをすかさず、さらに前に倒す。ちょ、まっ、とカニスは悶絶。横で一夏がだろうね、と呟く。

「ＩＳのことでわからないことがあれば、まぁ、泣いて頼まれたら考えて差し上げてもよくってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

唯一、を強調して言う。教官倒したのか、そりゃすごいな。すると一夏が思い出したように言う。

「入試って、ＩＳ動かして教官と戦うあれ？」

「それ以外に何かあります？」

「俺も倒したぞ。教官」

「あ、お前も倒したの？」

「カニスも倒したのか？」

「あぁ。動かすの初めてだったんでハンデでダンと一緒だったけどな」

「山田先生が相手だったからな、それなりに苦戦したぜ……」

数日前の記憶。カニスと一緒に山田と戦ったのを思い出す。初めて触れるわけであって、二対一というハンデは付けてもらった。そのままセシリアそっちのけで三人で話し始める。ＦＣＳ（射撃管制システム）が悪いやら、ハイパーセンサーは慣れるまでちょっと気持ち悪かったやら。

わなわなと肩を震わせるセシリアにダンがやっと気づく。
「わ、私だけと聞きましたが？」
「女子ではってオチじゃないのか？」
「そうみたいだな。俺らは全員、教官墜としてるわけだし」
ぴしっという何かが割れる音。そんな音が聞こえて、本格的にまずいんじゃないか、と思った。というか、マズイ。
「あなた達！　あなた達も教官を倒したというの！？」
「まぁな。マッハで蜂の巣にしてやったぜ」
「二人がかりでだけどな。でも、勝ちは勝ちだぜ」
「俺は倒したっていうよりも勝手に自滅されたからな……というか落ち着けよ、な？」
一夏が言う。だがセシリアは落ち着いてなんかいられなかった。
「こ、これが落ち着いていられ――」
三時間目の開始のチャイム。彼女は捨て台詞のようなものを吐いて席に向かって走っていく。カニスも一夏も戻って行った。
扉が開かれ、千冬が入ってくる。一、二時間目とは違い彼女が授業をするみたいだ。
「では授業を始める。だがその前に再来週行われるクラス対抗戦に

出る代表者を決めておく」

代表者？対抗戦？　何の事だ。ダンはシャープペンをカチカチ鳴らす。

「クラス代表はそのままの意味だ。対抗戦以外にも生徒会の会議や委員会への出席、要はクラス長だ。それと、一度決まると一年間は変更できないからな」

教室が少しざわつく。こういうのは勘弁だ。他の奴がやってくれることを期待してペンを回す。

こういうのは確実に大変な仕事を押し付けられるからな。

「はいっ、織斑君を推薦します！」

ははは、面倒押し付けられたな一夏。こうなることはだいたい予想できてたけどよ。

「私はダン・モロ君がいいと思います」

え？　正気か？

「候補者は織斑一夏とダン・モロか。他にはいないか？　自薦他薦は問わんぞ」

抗議せねば。このままじゃ代表にさせられちまう。カニスの馬鹿はなにやってんだ。こういうのやりたがる方だろお前。

立ち上がって抗議しようとする。面白いことに一夏とほぼ同じタイミング。

「ちょ、ちょっと待った！　俺はそんなのやらな――」
「そうだぜ！　俺らよりも、他に適任がいるだろ――」
すると千冬にギロリと睨まれる。
「自薦他薦は問わないと言った。他薦に拒否権などない。選ばれたからには覚悟を決めろ」
「だ、だからって――」
反論しそうになったのを、誰かに遮られた。
「待ってください！　納得がいきませんわ！」
セシリアだ。立ち上がり抗議を始める。どうみてもクレーマーだ。そしてクレームを続ける。
「そのような選出は認めません！　男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！　実力からすればわたくしがクラス代表になるのは必然！　それを物珍しいという理由で極東の猿なんかに」
まだ続けるか。よく口が回るな、あの女。
ダンはカニスの方に目を向ける。若干イラつき始めてるのが見て取れた。
セシリア・オルコット、その辺にしておけよ、自分の身が心配なら。
「人はみーんな猿だろうが。あれ、違ったか？」
カニスが口を開いた。そろそろマズイかもな。

セシリアはカニスを睨む。だがカニスは知らん顔を決め込んだ。

「ふん。いいですか、代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！　大体、文化として後進的な国家で暮らさなければ――」

「少し黙っとけよガキが。殺すぞ」

カニスがセシリアを睨みつけ言う。殺気が漏れ出している。

確かに、彼女の言葉は少々目に余るものがある。

「イギリスだったか？　そんなにイギリスが好きならさっさと国に帰ってろボケ。そもそも、国家という概念自体が古臭いんだよ」

言い放つ。カニスめ、余計なこと言いやがって。途中まではいいが、後半が余計だ。

周りからのカニスへの視線がすごかった。敵意を向けた目、何を言ってるのか理解できていない目、この状況をよしとしない目、色々だ。

「あなた、わたくしの祖国を侮辱しますの？」

「してますの、じゃねぇよ、してんだよ。弱い奴ほどよく吠えるよな。まさにお前みたいだ」

「おい、その辺にしておけよ、カニス。かわいそうだろう？　本当のこと言うのは」

仲裁に入る。あんまり言いたい放題言いまくると出席簿が飛んでくる。

仲間が叩かれるのは見ていて気持ちいもんじゃない。若干すかっとするけど。

「決闘ですわ！」

「いいぜ、受けて立ってやるよ。そっちのが早い」

「……なぁ、それ、俺にやらしてくれないか？」

俺は言う。二回目だが、彼女の言動は少々目に余るものがある。ここで少し痛い目を見てもらわないと。それに、俺は代表に推薦された身だ。いずれ、代表を決めるために戦わされることもあり得たはずだ。

「あなたが？　まぁ、誰がかかってこようとわたくしには勝てませんわ」

「どうだかな。あんまし油断してると足元をすくわれるぜ？」

「言っておきますけど、わざと負けるなんてマネしたらわたくしの小間使い――いえ、奴隷にしますわよ」

「手を抜くなんてことはバカ以外する奴はいないさ」

手を抜いたら何にも勝てないって。

「ハンデは、どんくらいつけるか……。希望はあるか？」

だが、男である俺が女の子一人に本気でかかるなんてのはそれこそ恥ってやつだろう。

実際に本気で女の子をぼこぼこにしてみろ、それじゃ悪役だろうが。
だが、その時クラス中に笑いが巻き起こる。

「ダン君それ本気？　男が女より強かったのって大昔の話だよ？」

知るかよ。

「ダン君がＩＳ動かせるんだろうし、実力もあるのかもしれないけど、言いすぎだよ」

五月蠅いな。
だが、この世界では男の立場は低い。単純な力は役にはたたないらしい。
ＩＳは過去の兵器を遙かに凌ぐ超兵器だそうだ。まるでネクストだな。男女で戦争をしようものなら、男は一週間ももたない、とまで言われている。
酷い言われようだ。ランク１９の、テクノクラートのリンクスがこれを聞いたらなんて言うのかな。
まだ教室はざわついていた。

「黙れメスブタ共が。肉片すら残さずに消し飛ばされたいか？　あぁ？」

怒鳴るでもなく、カニスは言う。教室の女子は半分以上が黙った。
そこに、カニスを恐れず、食って掛かるやつがいた。

「何言ってんの？　男なんかに――っ！？」

カニスはその女子の前にいた。近くだったこともあるが、かなりの速さだ。

リンクスのほとんどが、肉体を強化されている。片手で鉄板を鉄くずに変えるような輩もいる。主にＧＡの最高戦力に。

「なんだ？　言ってみろよ。聞いてやる。男がなんだって？」

女子の首を片手で絞めながら、持ち上げる。

「お前らを殺すことなんて戦場で敵兵器を破壊することよりも簡単――いてっ」

振り返るカニス。後ろには出席簿を持った千冬。カニス、終わったな。

「席に戻れ馬鹿者」

「へっ、あんたにゃ敵わないよ」

「織斑先生、だ。馬鹿者」

へいへい、と席に着く。授業開始から十分近く過ぎた。

「では、一週間後にセシリアとダンの決闘で、勝った方に代表をやってもらうとしよう。織斑、お前は勝った方と戦え。お前の機体はまだ完成されてないからな。では、授業を開始する」

席に着く。自分からやりたいなんて、どうして言ってしまったんだ、という気持ちが無いこともない。

だが、カニスにやらせでもしたら本当に死人が出るかもしれない。

アイツは加減なんて考えない事が多い。

後ろの席の女子が話しかけてくる。授業中だぞ。

「ねぇ、ダン君、授業終わってからでも遅くないよ、セシリアに言ってハンデ付けてもらいなよ」

その声は心配しているものなのだろうが、見下されてるように感じる。

「心配してくれてるのか？　それとも馬鹿にしてんのか？　どちらにせよ、男に二言は無い」

「私語はするな」

千冬の声と共に、出席簿が飛んできた。文字どうり。

ダンはそれを頭を少し横に傾け回避。後ろの女子にクリーンヒットした。あーあ、かわいそうに。

俺は、授業に集中した。

4話（後書き）

えー、どうだったでしょうか。

若干カニスが凶暴化してますが、まぁ、機体名を訳すと残虐な獣になるから・・・いいよ・・ね？

次回、もしくはさらにその次には戦闘描写を入れないとな…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1646v/

IS fA　〈インフィニット・ストラトス フォーアンサー〉

2011年10月9日12時00分発行